



# 日本ラテンアメリカ学会

## 会 報



AJEL

1996年11月5日

AJEL

№ 59

### 1. 学術・文化情報

- ラテンアメリカニスト会議
- 大陸間集会 (チアパス州)
- 国内関連学会・シンポジウム

### 2. 近著紹介

### 3. 海外ラテンアメリカ研究センター紹介 (18)

### 4. 事務局から

- LASA会費納入について

### 1. 学術・文化情報

- 「第1回欧州ラテンアメリカニスト会議」 (I Congreso Europeo de Latinoamericanistas) 報告

本年6月26日から29日までの4日間、スペインのサラマンカにおいて開催された。オーガナイザーはラテンアメリカに関する社会科学研究所欧州委員会 (CEISAL: Consejo Europeo de Investigaciones Sociales sobre América Latina) とイベロアメリカ研究スペイン委員会 (CEEIB: Consejo Español de Estudios Iberoamericanos) であり、実行委員会は会場校のサラマンカ大学のイベロアメリカおよびポルトガル研究所 (Instituto de Estudios de Iberoamérica y Portugal) と共同で組織された。発足の経緯は第48回アメリカニスト会議 (於ストックホルム) において、CEISALが行った、ラテンアメリカと欧州間での科学・学術的協力関係について議論する場を設けたいという提案であった。具体的には1年半に1度開催されているLASAのような幅広い学術的会議

をラテンアメリカと欧州双方の地域研究を基盤に始めようというものである。

今回のサラマンカ会議はその初めの一步を記すものとなったが、「ラテンアメリカ: その現状と展望」という総合テーマが掲げられ、多様な学術領域におけるラテンアメリカ研究をとりこむ内容となった。エデルベルト・トーレス=リーバスとアラン・トゥレーヌによる特別講演のほかは、ワークショップ (taller) 形式による分科会単位 (各々4~5人で構成) で報告が行われた。全部で62テーマのワークショップが組織され、オブザーバーと合わせて計1000人以上がエントリーしたという。ワークショップのテーマはラテンアメリカ・欧州間国際関係、女性と発展、政治改革と統治能力、人権問題、コミュニティ運動・参加、経済統合、ラテンアメリカ文化、等等、概してマクロ経済研究、歴史研究は少なく、今日的な社会政治的問題に集中していた。欧州会議とはいえ、報告者 (幡谷) の目からはスペインとフランスからの参加者が圧倒的であったように見受けられた。炎天下のサラマンカゆえ、午前に2セッション、遅い昼食と「シエスタ」をはさみ、午後のセッションは夕方5時からというスケジュールも領ける。歴史的遺産に包まれたサラマンカでの開催は第1回の会議にふさわしい彩りを添えたと同時に、

#### <LASA団体加盟の方へ>

会費納入方法が変わりました。詳細については、本年総会で配布したプリントあるいは本会報末の事務局からの項を御参照下さい。

参加者の議論への集中力を半減させてしまったくらいもある。シエスタの後は魅惑的な建造物を背中にプラザでグラスを傾け、文化談義に興ずるラテンアメリカニストたちがめだち、従って午後のセッションはキャンセル続出であったり、期待していた報告者が現れなかったり、という、LASA同様、大きな会議にありがちなハプニングには事欠かなかった。しかしながら、新たなネットワークづくりと、欧州における社会科学におけるラテンアメリカ研究の潮流をかいま見るだけの収穫はあった。ちなみに幡谷は「ラテンアメリカ都市：都市化、人口移動、生活水準」というワークショップに参加したが、スペインで同じコロンビアの大衆居住区研究をまとめている地理学者や、ドイツにおけるブラジル都市研究者などとの交流が深まり、有意義であった。プログラム等詳細については幡谷までお問い合わせ下さい。(幡谷則子 アジア経済研究所)

#### ○「人類のために、新自由主義に反対する大陸間会議」に参加して

7月27日～8月3日、メキシコのチアパス州で、サパティスタ民族解放軍の呼び掛けで「人類のために、新自由主義に反対する大陸間会議」が開催された。会場は反乱行政地区内に設営された5つのアグアスカリエンテスである。チアパス高地のオベンティックでの開会式、5会場での分科会(政治、経済、文化、社会、先住民)の後、8月2・3日にラカンドン密林地帯のラ・レアリダーで全体集会と閉会式が行われた。メキシコから1500名、43の外国から1600名、計3000名以上が参加した。外国人参加者の大部分は準備集会が組織されたヨーロッパとアメリカからだった。アジアからは日本(女性5名、男性6名)とフィリピンのほか、イラン、トルコ、クルディスタンからの参加者(ヨーロッパ在住者)がいた。

私はオコシゴの約東40kmにあるフランシスコ・ゴメス(ガルージャ)反乱行政地区で開催された「多くの世界を内包するこの世界」

と題する第5分科会(先住民)の「新旧のアイデンティティ」部会に参加した。7月29日の昼の分科会開会式は、サパティスタやゲリラ戦士を讃えるコリード、いま流行のクンビア「チュパカブラス」などのダンス曲の演奏で始まり、サパティスタ司令部の挨拶、アメリカ先住民による聖なるパイプの儀式、各国参加者代表および「インディオ国」代表の挨拶があった。部会での口頭発表や討論は夕方の6時から始まり、31日の午前中まで続き、31日夜に分科会の総括集会が開催された。

分科会や部会の運営はサパティスタ民族解放軍の顧問を中心に進められた。会議の内容は、自家発電による不安定な電力供給のため不機嫌になるコンピュータをなだめながら入力された。そのため、一日の総括集会の終了はきまって深夜となった。そして深夜、降りしきる雨と泥のなか、地元住民をまじえたフィエスタが始まる。「われわれは夜を歩むもの」というサパティスタのことばが身を以て実感された。2週間以上かけて会場を設営した地元住民に感謝するためには、フィエスタを実施することが分科会参加者の最大の責務とされた。3日間の分科会の期間、フランシスコ・ゴメス反乱行政地区の住民約4～5千人が、外国からの珍客のことばや仕草を観察し、フィエスタを楽しんで帰ったという。

「新旧のアイデンティティ」部会で、私は「日本社会と先住民族」と題し、五百周年反対運動やアイヌ新法制定運動などを題材に日本社会における先住民族への関心の在り方について報告した。この部会での報告発表は次の3つのタイプに分類できる。

①アメリカ大陸の「インディオ国」の代表の報告：カナダのモホーク、米国のアメリカンインディアン運動、イロコイ連盟、メヒコ・チカーノ運動、アリゾナのヤキ、メキシコのアナワク防衛委員会(ナワ)、ウィシヤリク(ウィチョール)、「蟻の力」(ニヤニユ)。

②先住民社会で活動している非先住民の報告：メキシコのタラウマラ地域でのミッショ

ン、サポテカ地域（フランス）、ニカラグア（ドイツ、フランス）、エクアドル。

⑨先進国における先住民や少数者の自治運動に関する報告：カナダ（ケベック）、ベルギー、スペイン（ジプシー）、ギリシア（トルコ系住民）。

参加者はそれぞれ自分のことばで語り、会議は当初の予測どおりバベルの塔と化した。「インディオ国」代表は全般的に定められた時間（12分）を順守し、まとまった報告を行った。それに対し、ヨーロッパの報告者のなかには、発表慣れしていないのか、興奮のあまり失神寸前になりながら30～40分も長広舌をふるった若者や、「先住民のアイデンティティ」に関する学説を長々と紹介し、聴衆を買った老教授もいた。

8月1日の早朝2時過ぎ、フランシスコ・ゴメスを出発し、PRI派農民が撤去した橋を修復しながら、15時間近くかかってラ・レアリダーに到着した。8月2日の昼から各分科会の報告が行われたが、炎天下での不必要に長い報告（経済）にはブーイングが続出した。第5分科会の報告が行われる頃には周りは暗くなり雨も降りだした。「インディオに関するテーマはいつも最後に回される」とヤキ民族の代表トニー・バレンスエラが呟いたことばが印象的だった。具体的提案として、ネットワークの構築、軍隊の撤収や政治囚の釈放を要求する抗議行動などが提起された。今年の12月に第2レアリダー宣言の国際的協議を実施することや、来年にヨーロッパで第2回大会を開催することも決まった。

会議の討議内容を入力したディスクレットは各国委員会に送付される予定である。また、各部会や分科会での議論、全体集會に提出された分科会報告などは15日以内に編集され、出版される予定である。その報告書を翻訳し、『もう、たくさんだ！—メキシコ先住民蜂起の記録』（現代企画室）の番外編として刊行することも検討中である。

（小林致広 神戸市外国語大学）

### ○シンポジウム《経済統合と政治的民主主義：ラテンアメリカ、EUなどに見る国際社会の新しい動向》を主催して

日本国際政治学会は今年創立40周年を迎えたことを記念して今年9月20日から22日に千葉の幕張メッセで世界大会を開催した。国際政治学会には多くの分科会があり、小生はラテンアメリカ分科会の責任者を仰せつかった関係で、世界大会のためにパネルを準備するよう依頼を受けていた。世界大会のテーマは、“globalization, regionalism and nationalism: Asia in search of its role in the 21st century”であり、ラテンアメリカ研究の立場からこのテーマと関係の深いトピックは何なのか、正直言って大いに迷ったが、最終的には regionalism の発露としての NAFTA や MERCOSUR などの経済統合と、globalization の一環としてラテンアメリカをも席卷している民主化という二つの動きがいかにかかわるのかをテーマにすることにした。このふたつの動きは無関係に見えるかもしれないが、EU や MERCOSUR の場合には統合と民主主義とを積極的に結びつけていこうとする姿勢が明瞭に読み取れるし、こうした問題設定もあながち間違っていないのではないかと思ったのである。ただし、テーマは決まったものの、世界大会のパネルには海外からの報告者や討論者を複数含むことが条件とされており、招待者の旅費などをいかにして捻出するかが大きな課題となった。幸い、神戸大学には創立90周年記念基金があり、そこからの支援（さらにサントリー文化財団の助成）が得られたので、この問題は一応クリアしたが、神戸大学の基金は学会への支援では駄目で、大学としての独自の企画であることが条件だった。そこで、まず神戸大学でシンポジウムを開催し、そのあとで幕張に外国招待者を連れて行くことにした。こんな次第で、まず9月17日～18日に神戸大学で標記のテーマでシンポジウムが開かれることになったのである。

このシンポジウムについては日本ラテンアメリカ学会の会員の皆様にはご案内を差し上げたのでご記憶の方もおられるかと思うが、外国からは NAFTA と米国との関係について Howard J. Wiarda 教授（マサチューセッツ大学）、MERCOSUR とブラジルの民主主義について Héctor Alimonda 教授（リオデジャネイロ連邦農業大学）、MERCOSUR とアルゼンチンについて Roberto Russell 教授（FLACSO 教授）に発表して貰い、本学会からは発表者として竹内史子会員（「中米における統合と民主主義」）、討論者と司会で恒川恵市会員、討論者として狐崎知己、大内穂、西島章次会員に参加していただき、小生が問題提起と司会を務めた。2 日間にわたる議論は時として白熱したものとなったが、外国研究者からはメキシコの NAFTA 加盟は経済的動機で説明されるとしても、米国の場合にはそれ以外に戦略的・政治的動機が重要だったのでないかといった指摘（Wiarda 教授）や MERCOSUR の目指す民主主義が制度的側面に限っていると批判（Alimonda 教授）、さらには MERCOSUR の場合には統合の民主的効果とともに民主化から統合への動きも無視できないとする意見（Russell 教授）などが出された。そのほか、EU や ASEAN との比較をめぐって活発な議論が繰り広げられた。幕張における世界大会の場ではパネルは 1 時間半と短かったが、統合と民主主義とのかかわりをめぐって熱のこもった議論が展開された。

神戸シンポでは遠路はるばる御出席いただいた本会員の方も少なくなく、この場を借りてお礼を申し上げる次第である。

（松下洋 神戸大学）

#### ○「ラテン・アメリカ政経学会」

10月5日（土）6日（日）の両日、天理大学にてラテン・アメリカ政経学会が開催された。

プログラムは以下のとおり。

講演 (1) Héctor Gurgulino de Souza (国連大学学長) 「国連大学とラテン

アメリカ研究」(英語)

報告 (2) 山本純一「インターネットを利用したラテン・アメリカ研究の可能性と限界：データベースの構築と研究ネットワーク作りに向けて」

(3) 尾関 修「ペルーの景気循環と経済成長の長期的見通し」

(4) 武部 昇「ラテンアメリカにおける南南協力の課題」

(5) 佐野 誠「日本の国際開発思想：ラテンアメリカとの関連において」

(6) 西島章次「ラテンアメリカにおける新経済自由主義の成果と課題」

(7) 住田育法「ブラジル開放化の20年」

(8) ヒラノ・セジ「ラテンアメリカと世界市場の序列化」(ポルトガル語)

Souza氏による講演では、ラテンアメリカに関する国連諸機関による飢えや人口増加、暴力、経済的不公正、環境破壊などの研究課題に社会科学はもとより自然科学、人文科学の協力のもと、研究者の英知を集めて取り組む必要を強調した。研究報告では、ラテンアメリカの経済問題をテーマにした報告が中心であった。新自由主義論(6)や景気循環論(3)の報告は、東アジアや域内諸国との比較が各報告の要となっており、また開発援助・協力(4)と開発思想(5)に関する報告では、日本の役割や日本独自のアプローチが強調された。(7)では、地政学的、文化的な視点からのブラジル社会の分析がなされた。(8)報告では、新自由主義や統合化による楽観論に対し、ラテンアメリカをはじめとする周辺地域は、先進国との資本・貿易関係では総体としてシェアを減らしており、世界市場での序列化が進んでいると指摘した。この学会でもっとも注目を集めたのは、インターネットとラテンアメリカ研究との関連を論じた報告(2)であった。情報化の速度と広がりには驚くばかりである。

(辻豊治 京都外国語大学)

2. 近著紹介 黒田悦子『先住民ミへの静かな変容 — メキシコ  
で考える』朝日新聞社、1996年、240頁。

紹介者：初谷讓次（天理大学）

1982年の金融危機以降、メキシコは経済的にも政治的にも大きな転換期を迎え、とりわけ前サリナス政権期（1988～94年）にはサリナストロイカと呼ばれる経済自由化政策が実施され、現在のNAFTA路線に至っている。こうした外部の大転換が、農村社会とりわけ先住民社会にどのようなインパクトを与えているのだろうか。あの家族は、ちゃんと生活しているのだろうか。あの村はどうなっているのだろうか。といったメキシコ研究者の多くが抱いているだろう心配や関心を、本書の著者は共有している。本書は「この変貌の諸相を過去の姿と比べながら素描し、高地ミへ社会の行方を考えた」ものである。

本書の著者は、2年2か月間（1973～76年）のフィールド調査にもとづいてメキシコ先住民集団のひとつ（先住民言語による分類）であるミへの社会組織と儀礼の仕組みについてかず多くの論考を残している。その一部は『フィエスタ』（平凡社、1988年）としてすでに一冊にまとめられている。今回の本書は、書き下ろしであり、著者が1991～93年にかけて短期ではあるがミへ社会を再訪したさいに感じた同社会の激変について述べたものである。研究者のみならず一般読者をも対象にして、平易な文体で書かれている。15年ぶりにミへ高地を訪れた、筆者を迎えるかつての下宿先であったアユトラ村の先住民家族をはじめとするミへの人々の歓迎ぶりが、随所で行間からはっきりと読み取れる。著者とミへの人々の信頼関係が、たんに研究者とインフォーマントの関係を越えたものとして、読者に心地よいBGMとして一貫して本書を流れており、いささか情緒的言い方ではあるが、同時にそれが読者と著者とのあいだの信頼関係

をも築いている、という点を指摘しておきたい。

まず第1章で、著者がミへ高地を再訪することになったいきさつが述べられる。ついで第2章で収穫と移住の増加、第3章で道路網の整備と民族商人の成長による高地ミへ市場網ブロックの変化、第4章で食生活の変化、第5章で村における女性の生活と役割の変化、第6章で福音主義的プロテスタント諸派の進出による村の分裂の危機、第7章で祭りの変化、という順序でミへ社会の変化の諸相が語られる。そして、最後の第8章でミへ民族運動の現状と展望について述べられる、という構成になっている。

細部に触れる紙幅がないので、ここでは紹介者の関心にのみもとづいて一点のみに触れておく。第6章で扱われる、プロテスタント系諸セクトのミへ社会への進出とそれによる村の分裂という現象は、国内ではとりわけチアパス州の先住民社会で深刻であるが、紹介者のフィールドであるユカタン・マヤのあいだにもあり、メキシコ先住民社会一般に見られる現象である。ミへ社会へのセクトの進出の理由として、生態的条件の変化によりともろこし栽培がもはや共同体の生存維持の役割を果たせなくなったことで、その農事暦に深く結びついているカトリック聖人への信仰が揺らいでいること、というマロキン教授の説が本書では紹介されており、たいへん興味深い分析であり示唆的である。

最後にエスニック・リーダーのフェルナンドの言葉で本書は閉じられる。「500年もの圧迫にもめげず人々が生きてこられたのは、ミへ社会が人間を大切にされた社会だったからである。（中略）このような共同性のお陰で、

村は生きのびてきた。今さらこの方針を捨てて、国家の発展政策に与するわけにはいかない。(中略)村の一部の人ではなく、村の人全体が豊かになるような民族レベルの発展が必要なのだ。そのためには、近代科学と技術も必要に応じて受容しなくてはならない」。そして、著者は「さまざまな先住民のいなくなったメキシコを想像すると、それは寂しい

図でしかない」と述べているが、同感である。とはいえ、さらに500年後に、もし地球が存在しているのなら、きっとそこにはミへの人々の姿もあるだろう。紹介者は先住民がもつサバイバルの知恵と人類の英知を信じているし、著者もそう考えているに違いないと思う。

#### 近著紹介

『中南米におけるエスニシティ』研究班『否定されてきたアイデンティティの再発見 — ニカラグアにおける多様性の模索』神戸市外国語大学外国語学研究所、1996年、199頁。

紹介者：細谷広美（京都文教大学）

本論集は小林致広氏を研究代表とする「中南米におけるエスニシティ」研究班の研究成果を論集としてまとめたものである。全体は「略奪されたアイデンティティの模索」（小林致広）、「太平洋岸自治のゆくえ—幾度かのブームをこえて」（飯島みどり）、「社会変革過程としての識字教育」（牛田千鶴）、「フェミニズムと社会変革—女性教育の視点から」（松久玲子）からなり、資料として大西洋岸問題担当者だったルイス・カリオン・クルスによるサンディニスタ側の見解とMISURASATA批判、ニカラグア共和国とヤプティ・タスバのインディオ「民族国」との和平条約、ニカラグア大西洋岸地域自治憲章、ニカラグア・カリブ海自治地域大学学長ミルナ・カニンガムによる講演記録が加えられている。

本書ではまず、小林によってニカラグアにおけるインディオ像の歴史的概観および太平洋岸の住民とサンディニスタ政権の関係、北太平洋岸の住民の組織が「自治」によって求めているものとサンディニスタ政権側の構想のずれ、チャモロ政権下の現状が分析されている。また、北大西洋岸の住民の求める自治

が、ミスキート、スモ、ラマ、クレオールといった「先住民族自治」から、民族集団の居住する「地域」の自治へと移行しているという指摘は重要である。

続く飯島論文では、ミスキートの歴史的背景が概観された後、1995年に筆者が太平洋岸北部自治地域の中心であるプエルト・カベサスを短期間訪れた際の観察と首都マナグアでのミスキート関係者とのインタビューに基づいた、最近の大西洋岸の現状についての報告がなされている。

3番目の牛田論文は、ソモサ政権下から現政権までの識字運動の展開について調査をおこない、その結果を分析している。そこでは50.35%であった非識字率を5カ月間で12.96%に減少させ、大きな成功をおさめたかにみえるサンディニスタの識字教育が、同時に革命に参加しうる「新しい人間」の創造とその意識化を教育理念として有していたことが示されている。このため、特に大西洋岸の少数民族における識字運動では、「国家的現実に基づく意識化をいそぐ革命政権と、反ソモサ闘争を太平洋岸の出来事として傍観し、『革命』という単語すらしらなかった、ミスキー

トの人々との間のギャップは、識字運動とともに広がっていった（牛田67頁）」ことを明らかにし、革命運動における太平洋側と大西洋側の抱えていた現実の相違が提示されている。

4番目の松久論文は、サンディニスタの革命によって大きく進展したとされているニカラグアの女性解放が、実は従来AMNLA E（ルイス・アマンド・エスピノサ・ニカラグア女性連合）の活動に焦点があてられてきたことを指摘し、サンディニスタ政権の女性解放政策とその限界について検証している。

本論文集で見いだされるのは、ニカラグアにおける多様性の模索という副題がつけられているように、まさに大西洋岸をめぐる問題

の複雑性である。大西洋岸という周縁的視点から変遷してきた政権の政策を検討し、国家をみようとする観点は重要である。文化人類学の分野においては、近年先住民族や文化、歴史を語るうえでの言説における恣意性、政治性の分析がおこなわれているが、大西洋岸と国家の中心である太平洋岸とのずれを明らかにし、そこにみられる様々な言説を提示、分析した本論集は興味深い。ただ、欲をいえばクレオールという言葉一つとってもラテンアメリカの各地域によって意味内容が異なっているため、大西洋岸の先住民族の背景についての説明がもう少し欲しかった。また、大西洋岸住民の多声性がもう少し拾われていればよかったのではないかと考える。

## 研究部会のお知らせ

### <東日本部会>

日時 11月16日（土）2:00～5:00

場所 上智大学中央図書館（L号館）

L-524

報告 山脇千賀子（筑波大学大学院）

「『ペルー料理』の成立をめぐる社会史—国民文化概念の再検討」

北岸 団（獨協大学非常勤講師）

「北川民次と野外美術学校」

西村秀人（東海大学非常勤講師）

「アフロ・ウルグアイ音楽にみるナショナル・アイデンティティ」

### <中部日本部会>

日時 11月30日（土）2:00～

場所 鈴鹿国際大学 管理研究棟2階会議室

報告 立岩礼子（南山大学）

「ヌエバ・エスパーニャにおけるスペイン統治の浸透とメキシコ市参

### 事会の役割」

富田 与（四日市大学）

「ペルーの中小企業振興策」

### <西日本部会>

日時 11月30日（日）2:00～5:30

場所 立命館大学 末川記念会館

報告 小澤卓也（立命館大学大学院）

「コスタリカの中立宣言をめぐる国際関係と国民意識」

斎藤 晃（国立民族学博物館助手）

「嘲笑から感嘆へ—植民地期アマゾンにおけるイエズス会ミッションの形成」

\* 西日本部会では研究会終了後、場所をあらためて懇親会を予定していません。

### 3. 海外ラテンアメリカ研究センター紹介 (18)

#### アジア・オセアニア研究所

#### Centro de Estudios sobre Asia y Oceanía (CEAO)

ハバナ市の閑静な住宅街ミラマール地区にあるこの研究所は、1985年に設立された。機構的にはキューバ共産党中央委員会に直属し、その名の通りアジア・オセアニア地域を研究対象としている。中央委員会直属の地域研究機関として、他にアメリカ研究所(CEA)、ヨーロッパ研究所、中東・アフリカ研究所があって、CEAOとは兄弟関係にある。常勤の研究者は10名前後だが、ハバナ大学など他機関の研究協力者が約50名いる。

研究対象地域はアジア地域とオーストラリアを含むオセアニア地域で、経済を中心とした社会科学の研究を行っている。以前はベトナム、カンボジア、ラオス、北朝鮮などに関する研究が中心だったが、最近では日本に加え、NIEsやASEAN諸国、APEC研究などが盛んになってきている。ただ、研究員の異動が比較的頻繁で、また所長が交代すると研究傾向ががらっと変わる傾向も否めない。日本研究者も現在所内で1名だけであり、じっくり腰を落ちつけて1国あるいは1地域の研究を長期にわたって行う環境が整うにはまだまだという印象である。

ソ連崩壊後の経済危機のさなか、キューバの他のすべての学術機関と同様、この研究所も人件費以外の費用はすべて自助努力で賄うよう政策転換が行われ、一時は出版物まで休刊してしまう状況になったが、94年には日本の大阪万博基金の援助で、パソコンやファックス、コピー機などが導入された。また定期刊行物もそれまであった雑誌を統合した、Asia and Pacific (A&P) (季刊) が2年前から出ている。

今ではキューバにおけるアジア研究の中心的存在として機能しており、また日本からキューバを訪問する研究者にとっては、最も有効な受け入れ機関となっている。と

くに、煩雑な事務手続きの多いキューバで最大限尽力してくれ、手続きを比較的速く進めてくれるので、様子のよくわからない外国人研究者にとっては非常に有り難い。

研究所内には日本研究部と東南アジア研究部が特に設置されている。日本研究部は日本の国際交流基金などの援助で、日本語クラスが設置され、日本に関する書籍・資料も年々増えている。図書館はおもにスペイン語と英語の文献が中心であるが、半分近くは日本に関する文献である。また、日本からの資金援助で海外の雑誌類も購読している。

また毎年9月から11月の間に、日本に関するワークショップとアジア地域全体に関するそれが開かれている。今年9月に第3回目が同時期に開かれ、日本からも3名が出席した。来年は9月と11月にそれぞれ開催される予定である。学術的な催しだけでなく、日本の場合の生け花や空手など、対象地域の伝統文化を紹介する活動も行っており、研究者ばかりでなく、地域に関心のある学生や公務員などの出入りも多い。

海外との交流は盛んに行われており、常勤研究者の多くは最低年1回は海外に出かけている。現在の所長 José Manuel Galego 氏は、今年国際交流基金のフェロシップを受け、アジア経済研究所の客員研究員として日本に滞在した。

研究所の連絡先は下記の通り。

Centro de Estudios sobre Asia y  
Oceania (CEAO)  
Calle 20 No. 512, entre 5ta y 7ma,  
Playa, Ciudad de La Habana CUBA  
電話/ファックス: 53-7-33-0591  
E-mail: asia@tinored. cu

(山岡加奈子 アジア経済研究所)



#### 4. 事務局から

##### 1) 寄贈図書

沼澤 誠『ラテンアメリカ経済論』学文社、

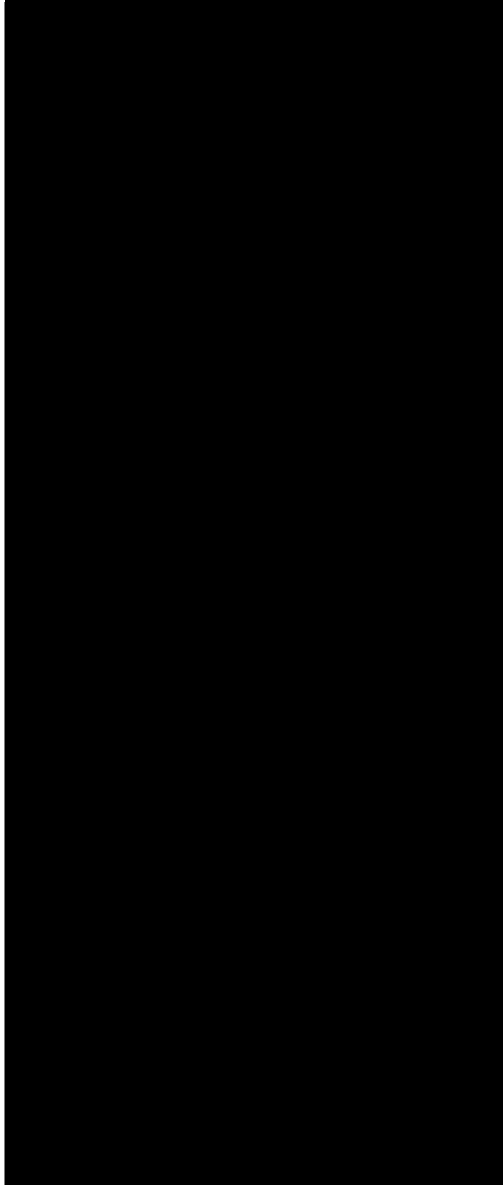
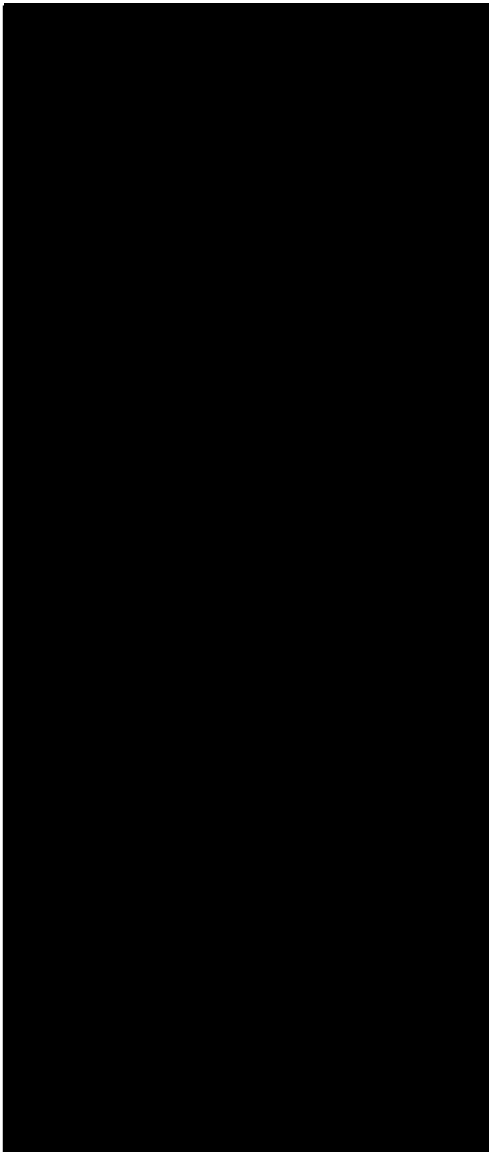
1996年8月刊

恒川恵市『企業と国家』東京大学出版会、

1996年9月刊

上智大学イベロアメリカ研究所『イベロアメリカ研究』第XVIII、第1号(1996年前期)

##### 2) 会員住所の変更



#### 訃報

井上義一、大西基夫両会員がお亡くなりになった旨、御遺族からの連絡がありました。ご生前の御研究を悼み、心よりご冥福をお祈りいたします。

#### 4) 会費納入のお願い

1996年度会費未納の方は納入をお願いします。

口座番号 01140-5-89476

加入者名 日本ラテンアメリカ学会事務局

#### 5) L A S A 団体加盟会費納入について

1. 支払い方法：会員個人が直接 L A S A 事務局に国際クレジットカード（ただし Visa と Mastercard に限る）などを用いて支払う。（ほかに、国際郵便マネーオーダー、銀行小切手なども可能であるが手数料が割高になる。）日本ラテンアメリカ学会事務局が配布する日英文の membership card に自己のクレジットカードの種類と有効期限、番号と氏名および金額とカテゴリーを記入して、郵送またはファックスなどで、L A S A 事務局に通知する。集金手続きは L A S A が行う。L A S A の会報 Forum 付属の会員用紙、一般向けの会費督促文などは無視する。
2. 支払期限：毎年12月31日までに次年度分の会費を支払う。
3. カテゴリー別会費金額：  
Category I \$ 56（教授等）  
Category II \$ 46（助教授等）  
Category III \$ 26（講師、院生等）  
ただし、III の新入会員のみに \$ 22  
退職者は、所得などにより自己申告する。
4. L A S A 事務局住所：

Latin American Studies Association  
946 William Pitt Union  
University of Pittsburgh  
Pittsburgh, PA 15260  
Fax: +1-412-624-7145  
E-mail: LASA@VMS.CIS.PITT.  
EDU

#### 5. その他：

- 1) 住所、連絡先、カテゴリーなどの変更は各自が L A S A 事務局に通知する。
- 2) 加盟会員は、日本ラテンアメリカ学会事務局に対しても、L A S A 事務局に送付する membership card の写し1部を年末までに送付し、本会事務局は、団体加盟会員の氏名とカテゴリーのリストを L A S A 事務局に送付することにより確認し、その事務を支援する。
- 3) 加盟希望者は日本ラテンアメリカ学会事務局に問い合わせること。

#### 編集後記

インターネットばかりである。3年ほど前、ペルーの研究者から Eメールアドレスの有無を聞かれ、簡単だと勧められたことがあった。この夏からネットサーファー（というらしい）入りした。この原稿も畑さんに Eメールで送った。送った実感がなく、何となく頼りない。隣接学会での議論で、テキサス大学のホームページ（lanic.utexas.edu）がラテンアメリカ情報の入口だと教えられ、またメキシコ関連のインデックスとして（www.trace-sc.com/menu.htm）が便利だとの情報をえた。ラテンアメリカ研究は、インターネットの活用を視野に入れたものになっていくだろう。（辻 豊治）

No.59 1996年11月5日発行  
〒654 兵庫県神戸市灘区六甲台町2-1  
神戸大学国際協力研究科  
松下 洋研究室気付  
日本ラテンアメリカ学会事務局  
TEL/FAX 078-803-0856  
郵便振替口座 01140-5-89476